パリの王様たち

ユゴー・デュマ・バルザック
三大文豪大物くらべ

鹿島茂

文春文庫

文春文庫

パリの王様(おうさま)たち

定価はカバーに
表示してあります

ユゴー・デュマ・バルザック 三大文豪大物(さんだいぶんごうおおもの)くらべ

1998年1月10日　第1刷

著　者　鹿島(かしま)　茂(しげる)

発行者　新井　信

発行所　株式会社 文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23　〒102
TEL 03・3265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷　製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-759001-8

江苏工业学院图书馆
藏书章

作家の王様たち

ユゴー　ゾラ　マ・バルザック　三人大豪大物くらべ

鹿島　茂

目次

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序　章　パッションの長期変動　9
第一章　巨匠の器　20
第二章　理由なき確信　51
第三章　偶然という名の必然　85
第四章　愛の駆動力（その一）　127

第五章　愛の駆動力（その二）　157
第六章　借金は創造の母　194
第七章　吝嗇と蕩尽の経済心理学　229
終　章　名声の戦場　267
あとがき　303
参考文献　307
解　説　中野　翠　313

パリの王様たち

ユゴー・デュマ・バルザック
三大文豪大物くらべ

序章　パッションの長期変動

一九九二年は、生誕百年ということでコンドラチェフの長期景気波動が話題になっていたが、私見によれば、長期波動は、景気ばかりでなく、その源となる人間の根源的なパッション（欲望）にもある。というよりも、正確にはパッションに長期波動があるので、その部分的な反映である経済活動にもそれが存在していると考えたほうがいいのかもしれない。つまり、経済にかぎらず政治でも文学でも、一世紀に一人というような巨人的な人物が一時に何人も輩出する好景気の時代と、三流四流の小物しか現れない不景気の時代が、長期の波動をなして交代しているということである。もっとも、政治と経済、そして文学というのは、それぞれの波動に時間差があるし、また各民族によっても時間的ズレが存在するので、いちがいには片付けられないが、いずれにしても、シュペングラーやトインビーの言うように、ひとつの文明全体のパッションも、個人の場合と同じく、成長と衰退の法則によって支配されていることは確実である。パッションの長

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

期波動は、人間という形で現れるので、経済統計のようには数量化できないだけのことである。

フランスを例に取って考えてみると、パッションの波動の高まりはいくつかの時代に観察されるが、そのうち政治的パッションの最大のピークがフランス大革命とそれに続く混乱の時代にあったことは、だれにも異論はあるまい。すなわち、この時代に、ダントン、マラー、ロベスピエール、あるいはナポレオンという政治的な巨人が一時に現れ、政治的パッションの好景気は天井を打つことになる。ところが、この時代には、経済と文学のパッションは、逆に不景気のどん底にあり、民衆の生活はメチャクチャ、文学者でめぼしい人間は一人も出現しない。ところが、ワーテルローの戦いを境にして、王政復古、七月王政と、政治的パッションが下降期に入ると、逆に経済と文学のパッションは底打ちして上昇に転ずる。このうち、まず文学のパッションが先行し、だいたい、一八二五年から三五年にかけて天井に達する。経済のパッションはこれより三十年ほど遅行して、一八五五年から六五年に最盛期をむかえる。つまり、政治、文学、経済はそれぞれ三十年ほどのズレを伴いながら同じ波形のウェーブを描いていく。

もっとも、こう言ったからといって、ここでパッションの波動の周期性それ自体を扱おうとしているとは考えないでいただきたい。私が考えてみたいのは、パッションの長期波動のうち、とりわけ文学的パッションの問題である。すなわち、文学的パッションは、政治的パッションのバブルがはじけたあとの政治的不景気の時代に、いわば、その

代償作用のようなかたちで膨らみ、ついで、政治的パッションの波動と同形の曲線を描いて、バブルの崩壊にあうが、次に経済的パッションの波動が押しよせると、それと交代するような形で、当分の間下向き曲線に終始するのである。

なぜこんなことを言い出したのかといえば、それは、ひとえに、日本を含めたヨーロッパ型の先進文明国において、近年、経済的繁栄とは裏腹に、文学的パッションが不景気のどん底にあるのが気になってならないからだ。もっとも最近は、経済的好景気も終焉を迎え、どうやら、次の波動のサイクルに入ったような気もするので、これからはおもしろい時代になるのかという期待もあるのだが、それにしても、もし今までの波動の原則が正しいとすれば、次の文学的パッションの高揚までは、まだ数十年は待たなければならない。二十一世紀の文学的好景気がどのような形を取るのか、じつに興味津々だが、それまで、こちらの命がもつかどうか。ならば、いっそ、過去の文学的パッションの高揚のケース・スタディーを行って、当座の興味をつなぐのはいかがだろう。というのも、もし、文学的パッションは先行する政治的パッションのパターンを踏襲するという私のひそかな仮説が証明されれば、次にくる二十一世紀の政治的パッションの好景気の分析によって、来るべき文学の姿を予想することもまた可能になるはずだからである。温故知新こそは、パッションの波動が一巡したかに見える現代においてとるべき姿勢なのかもしれない。

マスカルチャーが異常に発達し、もはやかつてのような通俗的イメージ通りの純粋な詩人や小説家などどこにもいないとわかっている現代においても、こと過去の文学者に限っては、依然として従来通りの紋切り型がまかり通っている。すなわち、十九世紀の詩人や小説家といった人間は、栄華の巷を低く見て、永遠のみを追い求める崇高なロマン的魂の持主であり、政治的野心や経済的な欲望といった世俗的な願望とは無縁の純粋な存在だったというものである。こうした偶像崇拝的態度は、政治的偉人の場合はさすがに少なくなったが、こと文学者にかぎっては、いわゆる文学史と呼ばれる書物ばかりではなく、専門の研究書においても、あいかわらず主流をなしている。

ところが、純粋な魂の文学者といったイメージが成立したロマン主義時代の文学者の実像を調べてみると、出てくるわ出てくるわ、もし政治家だったら、それこそ銅像が引き倒されかねないほど、スキャンダラスな事実が次々に明るみに出される。とりわけ、その傾向は、一八〇〇年を挟んで生まれ、一八三〇年前後にデビューするユゴー、デュマ、バルザックなどのロマン派第一世代の文学者たちにおいて著しい。彼らは、名声、金、女といった世俗的欲望とは無縁だったどころか、むしろそうした欲望の権化だったといったほうがいい。そのすさまじさたるや、遥かに同時代人たちを凌いでいる。彼らの作品に登場する極端にデフォルメされた情熱的人物でも、彼らの傍らにおいたら顔色がなくなるほどである。その徹底ぶりがあまりにも見事なので、我々としては、どうしても考え方を一八〇度転換せざるをえなくなる。すなわち、彼らは、こうした世俗的欲

望「にもかかわらず」大傑作を残したのではなく、それがあったが「ゆえに」かくほどまでの偉業をなしとげたのであると。

このような観点に立つならば、これまで我々が、定義なしに使ってきた「文学的パッション」なるものの実態をある程度は明らかにすることができるのではないか。すなわち、「文学的パッション」とは、時代の情況によって、政治へと通じる出口をふさがれた世俗的欲望が、唯一許された出口である「文学」へと噴出したものなのである。したがって、大革命以後の時代においては、政治的パッションも、文学的パッションも、また次にくる経済的パッションも、じつは、同じ成分のマグマが地表に現れたものにほかならないのである。

この三つのパッションがすべて同根のものであり、同じ遺伝子的パターンを持っていることは、すこしでも十九世紀フランス史に当たれば、すぐに見当がつく。そして、その遺伝子的パターンには、いずれも「ナポレオン」という名がついている。

まず政治的パッション。これは当然「ナポレオン一世」である。ついで、文学的パッションには「われ、ペンのナポレオンたらん」という標語がかかっている。そして経済的パッション。これは「ナポレオン三世、あるいはサン＝シモン主義者」と命名される。

では、この三つのパッションに共通した「ナポレオン」という名前は、いったいなにを意味するのか。それを知りたければ、十九世紀の王党主義者にたずねてみるのが一番

てっとり早い。彼らは、「ナポレオン」と聞けば、間髪を容れずに「王位簒奪者」と答えるだろう。つまり、「ナポレオン」とは、なんの正当な資格もないのに、自己の欲望にまかせて、王位を奪った下賤の成り上がり者の別名なのである。ひとことで言えば、それは貴族を打倒して成り上がろうと目論むブルジョワ的欲望の象徴なのである。

文学的パッションは、こうしたナポレオン型の遺伝子配列を持つ欲望が、王政復古という閉塞的情況によって政治的な噴出口を失い、文学という別の熔岩道を通って爆発したものと考えてよい。山田登世子は名著『メディア都市　パリ』の中でこのへんの事情を見事に要約している。

フランスではナポレオンとともに私生児の世紀が到来する。無から成り上がって皇帝の座についたこの《私生児》の生涯はそのまま生きた小説であり、この特権的記号がロマン的魂の生産装置となる。（……）いわゆるロマン主義という現象は、なによりもまずテクストの内容のレベルではなく、この生の欲望のレベルに在る。（……）先行するのは《ナポレオン物語》であって、ロマン主義作家たちはそのナポレオン物語を模倣するのである。

山田登世子がここで使っている《私生児》という言葉は、ナポレオン型の成り上がり願望を分析する上で重要なキー・ワードとなる。すなわち、ロマン主義の作家は、フロイトの「ファミリー・ロマンス」の原理を忠実になぞって、現実の父親を否定し、自らを私生児、つまり栄光に満ちた高貴な父親の私生児であるという仮空の「家族」の「小

説」をつくりあげ、自らの欲望の大きさを正当化するが、もちろん、その場合には、想像上の父親は、ナポレオンその人と完全に同一視されている。ひとことで言えば、一八〇〇年を挟んで生まれた子供たちは、すべてナポレオンの私生児であり、自分はナポレオン二世だと思い込むように宿命づけられていたのである。だが、なぜかくも容易に、現実の父を否定し、空想の父と自己を同一化することができたのか。バルザックは『二人の若妻の手記』の中で言っている、「革命はひとり国王の首をはねたのではない。フランスの家庭のすべての父親の首をはねたのである」と。すなわち、「自由、平等、友愛」の標語を掲げる大革命によって、とりわけ欲望を抱いていい「自由」を受け取った革命の子供たちは、なによりもまず、家庭の中の「国王」の首をはね、そこにナポレオンの首を据えたのである。

だが、こうしたナポレオンの私生児たちのだれもが「ナポレオン二世」となれたわけではない。いいかえれば、「ナポレオン二世」となるためには、なんの資格もいらなかったが、ただひとつの必要条件を満たしていなければならなかった。それは、地表への噴出を可能にする巨大なエネルギー、すなわち成り上がらんとするとてつもない世俗的欲望を持っていることである。つまり、多くのナポレオンの私生児のなかでも、人並すぐれた世俗的欲望の持主のみが、「ナポレオン二世」となるレースの出場資格を得たのである。いってみれば、巨大な世俗的欲望は、蒸気機関車における蒸気のようなもので、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com